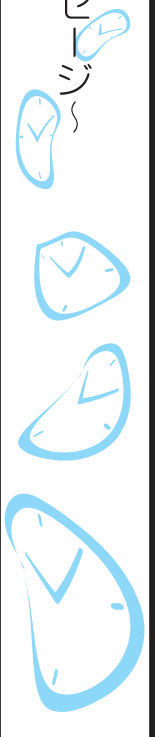


とまきの玉手箱

博物館からのメッセージ



第70回

磨上げられた名刀

彦根城博物館に所蔵されている刀剣は、いずれも大変に長い年月を経て伝来したものはかりです。当然、作られた当時の姿であるとはかぎりません。その一例が彦根藩三代藩主であった井伊直澄所用の刀です（写真①）。

この刀は初代直政の所用であったのが、直政の死後、二代直孝、直澄へと相伝された由緒ある品です。無銘ながら、長船倫光の作と伝えられています。備前長船（現在の岡山県倉敷市）の

刀といえば、まさに優れた刀の代名詞とされています。長船の地は、鎌倉時代中期から室町時代までの数百年にわたり、数多くの名工を輩出しました。倫光もその一人で、南北朝時代の長船派を代表する刀工です。倫光作という所伝を信じるかどうかは別として、刀の姿や刃文が互の目（同じ高さの山が連なっているように見える刃文）を主体としていることなど、南北朝

時代の長船派の作とみてよいでしょう。さて、この刀には、装飾として梵字が彫り込まれています。ただ、奇妙なことに、その場所は刀身だけでなく、柄によつて普段は表から見えない茎にまで及んでいるのです（写真②）。

実はこの部分、もともとは刀身の一部分でした。刀を短くするために、茎を切り縮め、本来刀身であった箇所を、茎として仕立て直しているのです。こうして刀を短くすることを磨上げといえます。

『埋忠刀譜』(写真③)によれば、この刀が現在の長さになったのは、正保4年(1647)のようです。おそらく当時の藩主であった直孝が命じたのでしょう。信長や秀吉が活躍した桃山時代ごろから、馬上から振り下ろす大太刀を、普段身につけるのに都合のよい短いサイズに磨上げることが流行しました。

あまりに刀が長い場合は、茎に刻まれた作者銘まで切り取られてしまうケースさえありました。このように、磨上げによって無銘になった刀を大磨上無銘といいま

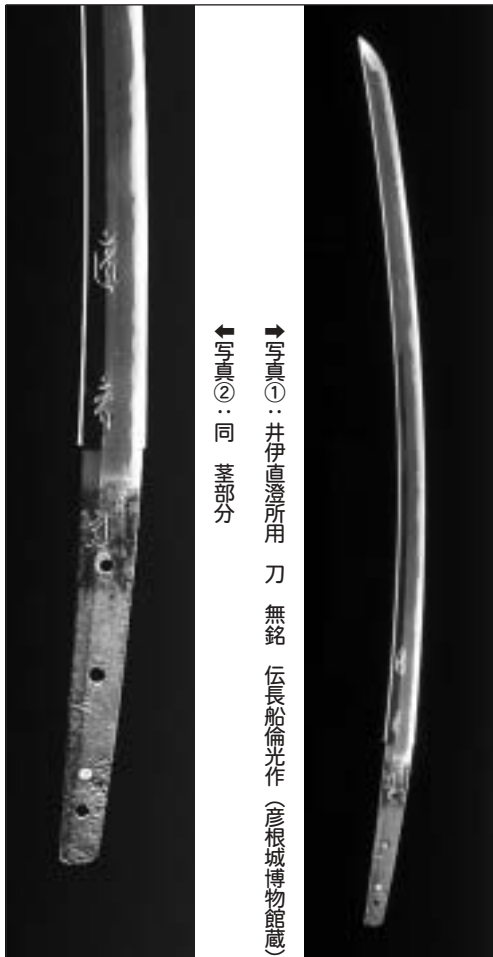
す。

こうしたブームのために多くの名刀、特に大太刀が流行した南北朝時代の作品が、持ち主の体格にあわせて惜しげもなく切り縮められています。この刀も茎にある梵字の位置からみて、本来は相当に長い刀であったと思われる。

古刀の茎を銘ごと切り取ってしまうなど、なにやらもったいない気もしますが、それは現代の目からみた感覚です。刀剣が文化財や美術工芸品として扱われている今とは違い、当時の武家によるこの行為は、あくまで刀が実用の道具であったことを再認識させてくれます。

(彦根城博物館学芸員 丹羽真之)

写真の刀は、彦根城博物館テーマ展「井伊家伝来の刀剣―備前長船派―」で、6月7日(金)から7月14日(日)まで展示します。



→写真①：井伊直澄所用 刀 無銘 伝長船倫光作 (彦根城博物館蔵)
←写真②：同 茎部分



写真③：埋忠刀譜 (彦根城博物館蔵)